

オレリエン・ハンターの スイスへの誘い

イヴェルドン人の日本



スイスのイヴェルドン・レ・バン市の使節団が鏡野町を訪れることとなりました。鏡野町では4月13日～15日（2泊3日）の短い滞在ですが、使節団は東京、京都、奈良と大阪を見てまわります。とても忙しい日程です。

イヴェルドン市の使節団来町を機に、同じイヴェルドン市出身のルネ・ヴォド氏（Rene VODOZ, 1894年～1969年）が日本滞在中に撮影した写真を『桜の陽に包まれて、父の日本、1924-1928』と題して、4月13日から5月末まで、ペスタロッツ館のギャラリーにて写真展を開催します。もともとイヴェルドン市の郷土博物館が企画したもので、鏡野町で開催するのにあたって展示物の中から21点を選別しました。皆様のご来場をお待ちしています！



ルネ・ヴォド氏

1920年代、スイスの機械産業は業務を世界に拡張しようとするなか、各地に若い技術者や営業マンを派遣していました。彼らは妻子を連れて何年か遠い国に滞在したあとにスイスに帰りました。

ルネ・ヴォド氏はそういった傾向の典型的な例で、1924年から1928年まで妻のネリーさんと2歳の息子、ジャンと神戸で過ごしました。

当時の在日外国人は日本人と交流することは少なかったようですが、ピアニストだったネリーさんは公演したり、コンサートを見に行ったりするうちに、ヴォド一家はたくさんの日本人と知り合って、友人も大勢でき、日本をとても気に入りました。帰国後も、何回も日本を訪れているそうです。



ヴォド一家

ルネ氏の趣味は写真でした。アマチュアながら、自分でたくさんの写真を撮ったり、日本の写真家が撮ったものを買ったりしていました。帰国後、1600枚もの写真に題名やコメントをつけて、6冊のアルバムに丁寧に整理しました。当時の日本では、カラー写真は非常に高価で珍しいもので、ヴォド氏の写真はもちろん白黒ですが、浮世絵や版画の技術を活かして鮮やかなカラー写真に見せかけられている写真も数点あります。家族揃って見に来るといい体験になると思います。



ヴォドの撮影した瀬戸内海（1926年1月）

1920年代といえば、そんな大昔ではないので、おじいさんやおばあさんの記憶がよみがえるかも知れません。なぜなら、写っている日本は大正世代の記憶の中にしかありません。ルネ・ヴォド氏の写真を見ると、当時の日本は軍国主義と産業化がどんどん進んで、大戦に向っている国にはとても思えません。本当に不思議な体験です。

2月号で紹介したスイス人に引きつづき、今回も日本を訪れて、なんらかの足跡を残したスイス人を紹介しました。スイスと日本の交流は長い歴史を持っています。鏡野町もその交流に参加しているのはとても素晴らしいことだと思っています。これからも両国、そしてイヴェルドン市と鏡野町の交友が長く続きますように…